

病氣の父を迎えに常陸国へ あたたかい心に支えられた姉妹の旅物語

「つゆ姉さん、やっと着いたわね。」

「うん、ここがお父様のいる青蓮寺よ。」

疲れきった二人の娘が青蓮寺にたどり着いた。つゆとときの姉妹である。二人は豊後国の臼杵藩からはるばる常陸国の青蓮寺まで、病氣の父親を迎えにやって来たのだ。

二か月かけて歩いた三百里の道は、二人にとって長く苦しいものだった。

この物語は、今から二百年以上も前の江戸時代にあった実話である。

つゆとときの父である初右衛門は、亡くなった妻の供養のためにお寺めぐりの旅に出たまま、七年

もの間、連絡がとれないままだった。

そんなある日、二人のもとに

「初右衛門は、常陸国の青蓮寺にいる。重い病気で旅を続けるのは難しい。」
という知らせが入った。

これを聞いた姉妹は、今すぐにでも、迎えに行きたかった。親せきから、若い娘の長旅を強く反対されたが、父を思う気持ちは日ましに大きくなり、二人は正式な「旅行許可」をもらうために代官所に出かけ、自分たちの思いを訴えた。代官所の役人たちも、姉妹の父を思う強い気持ちに心を打たれ、常陸国へ旅をすることを許した。

※常陸国の青蓮寺
現在の茨城県常陸太田市
にある寺。

※三百里
約千二百キロメートルの
距離。一里は、約四キロメ
ートル。

※供養
死者の霊に供え物などを
して、その冥福を祈ること。

※代官所
その土地の政治を行う所。

こうして旅を許された二人は、白杵の港から大阪行きの船に乗った。つゆ二十二才、とき十九才の時だった。白杵を出て十七日目、船はやっと大阪の港についた。大阪から、京都そして東海道へと道をたずねながら旅をした。

途中、恐いことや苦しいこともあったが、一緒に江戸まで旅をしてくれた人、食べ物やお金を恵んでくれた人、家に泊めてくれた人もいた。見ず知らずの人たちのあたたかい心が、旅のきつさをいやしてくれた。



江戸、常陸国へと長い道のりを進み、やっとの思いで父のいる青蓮寺にたどりついたのである。

「お父様。」

「つゆ、とき。お前たち、よくぞここまで来たのう。」

初右衛門が旅に出てから七年七か月ぶりに再会した親子は、抱き合って泣くばかりだった。別人のように変わり果てた父を見た姉妹は、その日から懸命に父の看病にあたった。姉妹は旅のためのお金をすべてつかい、村の医者薬をつくってもらったのんだ。村の医者も父を思う二人の懸命な姿に心を打たれた。

姉妹は休む間もなく、父が今までお世話になっていた村の人たちのところにお礼まわりに行くことにした。初右衛門が病気になる七年もの間、村の人たちはお見舞い



に来て話し相手になつたり、食べ物やお金をもつてきたりして、村中で支えてくれたのだ。

青蓮寺の人たちは、お礼まわりに出かけようとする姉妹に対して、

「まずは旅の疲れがとれるまでゆっくり休みなさい。お礼まわりはそれからでも遅くはない。」

と二人の体を心配したが、姉妹は、一軒一軒お礼を言うためにたずねてまわった。四、五日後には五十軒近い家をまわっていた。

このような懸命な姿は村の多くの人たちの心にひびいた。

二人が訪れた家々では、立派なふるまいに感動して、お米や野菜などを恵んでくれる人もいた。二人の評判は、水戸藩の役人にも伝わり、食料や暖ぼう用の薪などがあてえられた。多くの人たちの支えと二人の懸命な看病のおかげで、初右衛門の病気も回復していった。

つゆとどきが青蓮寺に着いてから四か月が経ち、ついに親子が旅立つ時がきた。水戸藩からは親子に真新しい旅装束と父が乗るためのかごが用意された。白杵藩からは、旅の付き添い役が二名来てくれた。青蓮寺は見送りに来た村人たちでいっぱいだった。皆、目に涙をうかべ別れを惜しんだ。

「ありがとう。ありがとう。」



※藩

藩とは江戸時代に、大名が支配した地域などのこと。

※水戸藩

現在の茨城県中部・北部にあつた藩。

※白杵藩

現在の大分県中部にあつた藩。

※旅装束

旅をするときの服装。

「さよなら。いつまでもお元気で。」

親子も、村人たちもお互いに見えなくなるまで手をふった。

二か月後、初右衛門、つゆ、ときの一行は白杵の港に無事到着した。白杵にもどってから、評判は、日に日に村中に広がり、人々はつゆとときを親孝行者としてほめたたえた。

ある日のこと、二人は父に悩みを伝えた。

「村の人たちは、私たちのことをほめてくださいますが、なぜか素直に喜べません。水戸藩の皆様や旅の途中で出会った方々から受けたご恩にこたえたくても、こたえることができません。どうすればよいのでしょうか。」

二人の話を聞いた初右衛門は、目を閉じて静かにこたえた。

「どうすることもできないが、今の私たちがこうして生きているのはどうしてなのか、これからも考え続けようではないか。」

父の言葉を聞き、二人は、しばらくだまっていた。

それから二人は、家の仕事にも村の仕事にも一所懸命取り組んだ。

人々はいっしょか、この姉妹のことを「二孝女」とよぶようになった。時代は、明治、大正、昭和、

平成と移り、「二孝女」の物語は今でも語りつがれている。



二百年の時を経てつながる人と人との絆

補助教材

大分県臼杵市と茨城県常陸太田市では、それぞれの市で「二孝女顕彰会」をつくり、活動しています。二つの市の「二孝女顕彰会」は、「二孝女」についての研究をさらに深めたり、互いに交流を重ねたりしながら、「二孝女」の物語を多くの人に伝えていきます。

臼杵市二孝女顕彰会の庄田啓介さんは、

「二孝女の物語は、生きることの大切さや思いやりの心、感謝の心など日本人が忘れてはならないことを私たちに教えてくれている。」

と語っています。

庄田さんたちは、二百年前につゆとときが受けたご恩に對して、二人になり代わり、茨城県常陸太田市へお礼に行くことを決めました。

二〇一一年秋、庄田さんら約五十人が「お礼参り訪問団」として、

「二百年前、初右衛門と二孝女がお世話になりました。」と書いた横断幕を持って、茨城県常陸太田市を訪ねました。

庄田さんら訪問団に対して、常陸太田市の人たちは、いっ



※顕彰会
個人の功績や善行などをたたえて広く世間に知らしめることを目的にした会。

せいに大きな拍手とともに

「お帰りなさい。」

と、明るく声をかけてくれました。そのとき荘田さんは、

「つゆととき、初右衛門の三人を支えてくれた常陸太田市

の人々の温かさがわかった。人の思いやりや感謝の心は、

今も二百年前も変わらないのだ。」

と感じたそうです。荘田さんたちは、初右衛門がお世話に

なった青蓮寺などを訪問し、三人がお世話になったことに

対して感謝の思いを伝えました。

このような交流を経て、平成二十七年十月十日、大分県

臼杵市と茨城県常陸太田市は姉妹都市となりました。二百

年前の出来事が、二つの市を結び付けたのです。

人は一人では生きてはいけません。人は気づかないところで、多くの人に支えられ生活していることを「二孝女」のお話は私たちに伝えてくれているようです。



※姉妹都市
文化交流や親善を目的とした
地方同士の関係を指す。